

わたしの聖戦

女性が
働くこと
ということ

医学ジャーナリスト・医学博士

植田美津恵

連
268
載

求められる「利他の心」

人工妊娠中絶、いわゆる中絶の方法は主に手術になるが、より安全な飲み薬という選択肢もある。現在日本では、飲み薬は病院や入院施設のある診療所・クリニックに限られ、入院設備のない施設では認められていない。しかし、それは明らかにおかしい。現に、手術と比較すると飲み薬による合併症はゼロという報告がある。無床だから使えない理由は見当たらないはずだ。

野でデジタル化が推進されているが、医療も例外ではない。それにより、患者の取り違えや投薬ミスなどの医療事故の軽減が期待できるし、最終的には事務作業の簡略化につながる。これを機にデジタル化にもっと力を注ぐべきだと思うが、逆にそこを言いわけにして、飲み薬に反対する。その姿勢は、医療従事者の倫理面からみても正しい判断とはいえない。

ることを意味する。各病院のホームページを見ても、価格はさまざま。10万〜20万が相場といわれるが、妊娠中期に入った場合は5万とうたっているところもある。もし、すべての病院施設で中絶の飲み薬が可能になったら、これまでの収益



局で購入することはできなかった。その時にもさまざま理由が並べられたが、世論に押される格好で、ようやく自由に手軽に入手することが可能になった。蓋をあけてみれば、妊娠検査薬を使っても、産婦人科を受診することに変わりはなく、施設側の収益に大きなダメージを与えることはなかった。産婦人科医の多くはホッとしたことと思う。

産の憂き目に遭うのは一般の個人経営者と同じなのだ。昨今の少子化で産婦人科の運営自体が厳しいものになっていく。それに加え、中絶という自由診療を奪われるのは、不安そのものといえるだろう。しかし、こは、是非とも患者（女性）の安全を最優先させて欲しい。子宮の内容物を掻き出したり、吸い出したりすることがいかに危険で女性たちの心を蝕んできたことか。